

平成29年9月1日(金)

平成29年度2学期始業式

おはようございます。2学期の初日に当たり、2つのことを皆さんとともに共有したいと思います。また、途中で、本を2冊紹介します。

1つめの話は、「学校は間違えるところである」ということ、2つ目は、「第一志望に拘り抜け」という話です。

まず、「学校は間違えるところである」という話です。人は、間違えたり失敗したりして成長します。これを試行錯誤と言います。その成長の過程はこうです。まず、間違いの理由を自分で考えます。答が見つかっても見つからなくても、誰かに確認をします。それは口頭でもいいし、活字でもいい。いずれかの方法によって、人は正解にたどり着きます。これを成長と言います。

ロシアの心理学者、ヴィゴツキーはこのことを「学びの最近接領域」と名付けました。つまり、人が学ぶとき、他人との協働を通して生じる学びと、個人の努力によって生じる学びには差があるということです。

従って、学びには他人の力を借りてもいいということになります。むしろその方が高い学びまで到達できるのです。

失敗は若者の特権であるとも言いますが、これは失敗してもやり直せる時間があることを意味しています。皆さんには、この2学期、高い学びを目指して時には他人の力を借りながら、大いに失敗を繰り返しつつ、成長してほしいと期待しています。

2つ目の話です。皆さんには是非第1志望に最後まで拘り抜いてほしいと思います。これは全校生徒にお願いしたいと思います。言い換えると、自分の夢に拘ってほしいということです。全校生徒の一人ひとりが夢に拘れば、その情熱が周囲に広がり、興奮と信念を巻き起こし、夢が現実のものになるといわれます。

アメリカの心理学者セリグマンは、その著書「オプチミストはなぜ成功するのか」の中で、楽観主義者の方が成功する確率が高いという研究結果を発表しています。

オプチミストとは、英語で楽観主義者の意味で、形容詞はオプチミステック、楽観的な。反対はペシミステック、悲観的な、名詞がペシミスト、悲観主義者です。

この本の中には、たくさんの実例が出ていますが、一つだけ紹介します。それは、アメリカのプロバスケットNBAのチームの分析です。

セリグマンは、アメリカのプロバスケットボールチームをその試合前後のコーチや選手のコメントによって、楽観的なチームと悲観的なチームに分けました。そして、その勝率を追跡調査したのです。その結果、楽観的なチームの方が勝率が高いということがわかりました。

楽観的なチームは、「失敗は一時的なもので、必ず取り戻せる」とコメントしていました。悲観的なチームは「失敗を永続的なもの」ととらえ、取り戻せないものと考えがちだったのです。

但し、ここで気をつけておいてほしいことがあります。単なる呑気さと楽観主義は異なるということです。アメリカの経済学者コリンズはその著書「ビジョナリーカンパニー」の中で、成功した企業の経営者を次のように評価しています。すなわち、優れた経営者は矛盾する2つの特徴を備えているということです。その2つとは、第1に「どれほどの困難にぶつかっても最後は必ず乗り越えられる」と確信していること、2つ目は、「自分の置かれている状況の中で最も厳しい事実を直視する」ということでした。

皆さんに伝えたいことは、失敗を恐れず、夢に拘って挑戦してほしいということです。そして決して悲観的になることなく前向きに考えながら、周囲の人とともに助け合って進んでほしいということです。そういう2学期に全員でしていきましょう。